

志賀直哉年譜考（八）

——明治三十七年九月から十二月まで——

生 井 知 子

明治三十七年（一九〇四）（数え二十二歳・満二十一歳）

- 9 高等学科二年に進級。．．．．．
- 9・1（木） 志賀直方の出征が決定。直哉は海江田を訪問。甘露寺受長らと会う。夜、田中平一、高崎弓彦を訪問。（日記）
- 9・2（金） 直哉は、朝、田中平一と有島生馬に手紙を書く。午後、三浦直介が来る。夜、田中平一と宮松亭に行く。広勝の「鷗山姫捨松」（中将）、小土佐の「傾城阿波の鳴門」八段目、素行の「仮名手本忠臣蔵」四段目、祖昇の「三十三間堂棟由来」（柳）、万八の「絵本太功記」十段目を聞く。今日の素行は、義太夫を聞き始めて一番感動した。（日記）
- 9・3（土） 丸善から“*Andersen's Fairy Tales*”が直哉の許に届く。夜、麻布亭に行くが、いずれも下手。（日記）
- 9・4（日） 午後、黒木三次が志賀家に来宅、戦死者について聞く。夕方から田村寛貞が来宅、夜、直哉は川村弘を訪問しようとしたが雨に降られ、黒木三次の家で遊ぶ。岩下家一來宅。（日記）
- 9・5（月） 直哉は午前一寸木村家に行く。夕方、三浦直介が志賀家に来宅、転校のことが破談になったと喜ぶ。アンデルセンの話を三つ読む。“*What the Moon Saw*”が最も面白そう。（日記）
- 9・6（火） 志賀直方に贈るものについて、志賀直温が怒り、直哉は泣く。（日記）

- 9・7(水) 志賀直方の出征を志賀家一同、新宿に見送る。直哉は内村鑑三の家に行き、岩倉道俱・木下利玄の家に寄るが不在。海江田、川村弘が来宅。(日記)
- * 志賀直道は、『覇者民忖々如 王者民悠々如』と書いて直方に与えた。(『祖父』二十三)(『叔父直方』)
- * 直方は、山形の歩兵第三十二聯隊の中尉。(阿川弘之『志賀直哉』)
- 9・8(木) 直哉はアンデルセンを読む。(日記)
- 9・9(金) 直哉はトルストイの『The Story of Illias』(『イリヤス』)を読む。夜、黒木三次が来宅。(日記)
- 有島生馬が直哉に葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 9・10(土) 夕方、直哉は、黒木三次と川村弘を誘い、田村寛貞の家に行く。木下利玄も来る。夜十二時からアンデルセンの『A Story of a Mother』を読む。(日記)
- 9・11(日) 直哉は志賀留女・浩と三井に行く。丸善でカーライルの『Heroes and Hero Worship』、ストー夫人の『Uncle Tom's Cabin』、トルストイのものを買う。中井常次郎の所で葉を貰う。田中平一來宅。(日記)
- 9・12(月) 学習院で学年始業式。(『学習院一覽 明治三十八年九月～三十九年八月』「記事摘要」)(日記)
- 夜、直哉はスマイルズの『Character』(『品性論』)を読む。(日記)
- 9・13(火) 学習院で授業が始まる。直哉は、南日恒太郎、神田乃武、白鳥庫吉などの授業を聞く。(日記)
- 9・14(水) 直哉は風邪気味。(日記)
- 9・15(木) 直哉は勤務学生にならずにすむ。夜、直哉は川村弘と宮松亭に行く。伊香保から帰った有島生馬も来ている。広勝の「菅原伝授手習鑑」四段目切、小土佐の「三十三間堂棟由来」(柳)、素行の「絵本太功記」十段目、祖昇の「傾城阿波の鳴門」八段目を聞く。ドイルを読む。(日記)
- 9・16(金) 直哉は、黒木三次・川村弘と有島生馬の家に寄り、絵を見せて貰う。トルストイを少し読む。(日記)

- 9・17(土) 直哉は、夕方から服部他之助を訪問。黒木三次・三浦直介・柳沢保承・柳宗悦・小沢定雄・松平茂時が集まる。「読売新聞」の戦争劇脚本募集記事を見て、『脱宮』の構想を練る(↓未定稿8の腹案中の作品リストに『脱宮』についての記述あり)。(日記)
- 9・18(日) 直哉は内村鑑三の所に行く。「コリント前書」四章第一から第五まで。内村の『非戦論』を習う。杉山得一の家で会合。ハウフと「歴史」を勉強。(日記)
- 9・19(月) 「武課」の時間に学生監が士官候補生の募集をする。直哉は『脱宮』の構想を練る。(日記)
- 9・20(火) 直哉はアンデルセンの“Buck-wheat”と“Wild Swan”を読む。ハウフとドイルを読む。(日記)
- 9・21(水) 病中の木下利玄が、直哉と正親町公和に、手紙を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 9・22(木) 「作文」で「暑中休暇」が課せられる。夜、田中平一が志賀家に来宅。柳生基夫から手紙が来て、直哉は返信を書く。(日記)
- 9・22(木) 帰宅後、直哉はカーライルの“Heroes and Hero Worshipping”を少し読み、服部他之助の家の会合に行く。(日記)
- 9・22(木) 直哉は、「読売新聞」(ハカキ集欄)に、「奈加葉」の署名で「ゲーテの天才を……」という文を発表。(新『志賀直哉全集』^⑩)
- 9・23(金) 内村鑑三らと高尾山に遠足に行く予定だったが、出来物のため、直哉は取りやめ、岩倉道俱、有島生馬を訪問。田中平一と京橋亭に行く。小政の「菅原伝授手習鑑」四段目、東吉の「増補忠臣蔵」(本蔵下邸)、駒栄の「百度平」、広勝の「本朝廿四孝」四段目(十種香)、呂行の「近頃河原達引」堀川の段を聞く。(日記)
- 9・24(土) 直哉は、「読売新聞」(ハカキ集欄)に、「奈加葉」の署名で「吾人は寝台に……」という文を発表。(新『志賀直哉全集』^⑩)
- 9・24(土) 直哉は歌舞伎座の演芸会に行く。田村寛貞と共に、有島生馬を訪問。月見のため舟遊びの予定だったが、雨で中止。

松平春光、川村弘、黒木三次も来る。（日記）

9・25（日）直哉は、内村鑑三の所に行く。「マタイ」の五章。帰途、岩倉道俱の所に寄る。（日記）

9・26（月）学習院の帰りに、直哉は本郷座で観劇。「フランチェスカの悲恋」「高野聖」を見る。高田実、河合武雄、藤沢浅次郎、佐藤歳三など。（日記）（『続々歌舞伎年代記』坤の巻）

9・27（火）直哉は久しぶりに柔道をする。夜、「国文」「倫理」、ハウフ、独文典を復習。西内条綱の戦死を知り、神に祈る。（日記）

9・28（水）夜、柳沢保承から『雪雄』を大会に出してもいいかとの電話があり、直哉は承諾する。（日記）

姫路に向かう川村弘が東京の有島生馬、直哉に葉書を書く。二十九日の消印。（『芳舟遺稿』所収川村弘日記、川村弘書簡）

9・29（木）直哉は、夜、服部他之助の所に行く。カーライルの「Heroes and Hero Worship」、ソクラテスの死についての話を聞く。九時過ぎ帰る。（日記）

9・30（金）有島生馬が直哉に、翌日の墓参の待ち合わせについて、葉書を書く。（『志賀直哉宛書簡集』）

直哉、有島生馬ら、森田明次の墓参。（M37・9・29直哉宛有島生馬書簡）
夜、柳沢保承から電話で、『雪雄』に賑やかなものを一幕付け加えてくれと言われ、直哉は名案もないのでトルストイの『悪魔の勝利』の脚色を考える。（日記）↓後の未定稿19『悪魔凱歌』

この頃か？
ラフカディオ・ハーンが死んだ時（M37・9・26没）、神田乃武が教場で読んで聞かせてくれ、非常に面白かったから、図書館にすべて買わせて、直哉は、木下利玄・細川護立・斎藤博などと借りだして読んだ。その後、自身でも丸善に頼んで取り寄せた。ハーンは死んでから知った。ハーンは文章を書く上に一番参考になった。一種単純な書き方など学ぶところがあった。（座談会『回顧』（『稲村雑談』）「読書」（『書き初めた頃』）

10・1(土) 学習院で柔道大会。(『学習院一覽 明治三十八年九月～三十九年八月』「記事摘要」)

柔道大会で終わりの授業が休みだったため、直哉は岩倉道俱を誘い、東京座で観劇。「不如帰」「太閤艶書合」「戻駕」を見る。芝翫、高麗藏、猿之助、女寅、銀之助、花助、勘五郎、秀調など。(日記『続々歌舞伎年代記 坤の巻』)

直哉は、「読売新聞」(ハカキ集欄)に、「奈加葉」の署名で(鳴かぬ鳥の……)という文を発表。(新『志賀直哉全集』^⑩)

10・2(日)

直哉は岩倉道俱を誘い、内村鑑三の所に行く。「テサロニケ」三章。汽車で目黒の青木別邸に行き、黒木三次・柳谷午郎・田村寛貞・岩倉道俱・柳沢保承・柳宗悦・里見淳・菅田敏光兄弟・三浦直介・小沢定雄と会合。その後、ジャック・プリンクリーの家に行き、百人一首をする。妹の稲・プリンクリーは半端に高慢だと思い、口もきかずに終わる。(日記『草稿』第三篇 四『大津順吉』第一二三)

直哉は、「読売新聞」(ハカキ集欄)に、「堀川与次郎」の署名で(陥落も……)という川柳を発表。(新『志賀直哉全集』^⑩)

10・3(月)

直哉は、ジャック・プリンクリーに電話し、明後日の約束をする。武者小路実篤にトルストイのメルヘンを借り、柳生基夫に貸す。「読売新聞」に投稿。(日記)

武者小路実篤から新体詩を書いた手紙が来る。(日記『武者小路実篤全集』)

有島生馬が直哉に葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

10・4(火)

直哉は帰宅後「国文」の勉強。志賀直方に手紙と『唐詩選』『三体詩』、有島生馬に手紙を送る。(日記)

直哉は、「読売新聞」(ハカキ集欄)に、「堀川与次郎」の署名で(白馬会……)という川柳を発表。(新『志賀直哉全集』^⑩)

直哉は、「読売新聞」(ハカキ集欄)に、「奈加葉」の署名で(小説として……)という文を発表。(新『志賀直哉全集』)

⑩

10・5(水) ドレスデンに行くことになったジャック・プリンクラーが、午後五時に暇乞いに志賀家に来宅。直哉は写真と合本

『藤村詩集』（M37・9刊）を餞別に贈る。（日記）草稿『第三篇』四

10・6(木) 直哉は夜、服部他之助の所に行く。ウオレスの話を聞く。（日記）

10・7(金) 朝六時、直哉はジャック・プリンクラーの見送りに新橋に行く。稲・プリンクラーに会う。ストレットン『堅信美談
薄命児』を読了。岩倉道俱に〇〇の娘を思いきるよう言って欲しいと、岩倉具幸に頼まれる。（日記）草稿『第三篇』

四）〔天津順吉 第一一三〕

10・8(土) 御岳山に一泊遠足の予定だったが取りやめ、午後、直哉は黒木三次・柳谷午郎・川村弘・田村寛貞・松平春光らと白

馬会に行く。柳谷・春光は運動会に行き、柳宗悦・柳沢保承・菅田敏光・三浦直介が加わり、道灌山に散歩。帰途

『トルストイの白露戦争観』を買って読む。「文芸倶楽部」掲載の泉鏡花『深沙大王』を読む。（日記）

10・9(日) 戦死した陸軍騎兵少尉・長岡護全の葬儀。（『学習院一覽 明治三十八年九月～三十九年八月』「記事摘要」）（日記）

直哉は、四谷の通りで別れ、内村鑑三の所に行く。黒木三次の家に行く。前日のメンバーも集まって遊ぶ。有島生馬も来る。有島生馬と岩倉道俱のことを相談し、古き恋物語などを語り合う。（日記）

10・10(月) 皇太子、学習院に行啓。（『学習院一覽 明治三十八年九月～三十九年八月』「記事摘要」）

直哉は、「物理学」の授業を受け、「武課」の時間に院長の訓辞を聞く。有島生馬から岩倉道俱が思いきったとの電話あり。（日記）

10・11(火) 直哉はスマイルズの「Character」を読む。（日記）

夜、駒込富士前町花田通方の有島生馬が直哉に手紙を書く。消印は十二日。岩倉道俱から礼の葉書が届いたとのコメントあり。（『志賀直哉宛書簡集』）

10・12(水) 「作文」で「理想の人」というテーマが課され、直哉は“Character”の論をそのまま書く。カーライルの“Heroes and Hero Worship”を読む。夜、田中平一と喜吉亭に行く。小政の「絵本太功記」十段目、祖昇の「生写朝顔話」宿屋の段、万八の「御所桜堀川夜討」を聞く。(日記)

10・13(木) 戦死した中村学生監の追悼会。(『学習院』一覽 明治三十八年九月～三十九年八月)「輔仁会記事摘要」(日記)
直哉はカーライルの“Heroes and Hero Worship”を読む。夜六時から服部他之助の所に行く。ウォレスの話は終わる。(日記)

10・14(金) 直哉は帰途、岩倉道俱の家に寄る。夜一人で喜吉亭に行く。若浜の「三十三間堂棟由来」(柳)、小政の「菅原伝授手習鑑」四段目を聞く。(日記)

10・15(土) 夜、直哉は服部他之助の家に行く。柳谷午郎・田村寛貞・黒木三次・松平茂時も来る。西洋料理のご馳走になる。(日記)

10・16(日) 輔仁会の第八回陸上運動会を開催。(『学習院』一覽 明治三十八年九月～三十九年八月)「輔仁会記事摘要」

午前六時の汽車で、志賀直哉、有島生馬、黒木三次、里見弴、柳宗悦で松井田へ旅行。(日記)「蝕まれた友情」二(里見弴『君と私』六)

夜、直哉は、妙義山麓で、木下利玄へ、押し葉を貼り付けた葉書を書く。(M 37・10・16木下利玄宛書簡)

10・17(月) 雨の中、一行は軽井沢に行く。直哉は有島生馬に肖像を書いて貰う。(日記)「蝕まれた友情」二(里見弴『君と私』六)
夜、軽井沢で有島生馬が直哉に葉書を書く。消印は十九日。(『志賀直哉宛書簡集』)

10・18(火) 島崎藤村を訪問する有島生馬と別れ、碓氷峠を下り、一行は東京に戻る。直哉・黒木三次・柳宗悦は、服部他之助の家に寄り、紅葉一枝を贈る。(日記)「蝕まれた友情」二(里見弴『君と私』六)

学習院にて開院記念式。(『学習院』一覽 明治三十八年九月～三十九年八月)「記事摘要」)

輔仁会秋季大会。（『学習院一覽 明治三十八年九月―三十九年八月』「輔仁会記事摘要」）

10・19（水） 田中平一、木下利玄が志賀家に來宅。林三郎を誘い、歌舞伎座で観劇。「宇都宮紅葉釣衾」「辰橋」「御詠雁金染」を見る。家橋、八百蔵、梅幸など。帰途、直哉は古い「新小説」「歌舞伎」を買う。（日記（『続々歌舞伎年代記』坤の巻）

直哉は、「読売新聞」（ハカキ集欄）に、「奈加葉」の署名で「自分の……」という文を発表。（新『志賀直哉全集』⑩）

10・20（木） 夜、直哉は服部他之助の所の会合に行く。（日記）

10・21（金） 直哉は田中平一の家に行く。メルヘンを読む。（日記）

10・24（月） 直哉は前日の疲労でぼんやりする。泉鏡花『三枚続』とイタリアの画の歴史を買う。（日記）

円通寺の有島生馬が直哉に葉書を送り、二十日に島崎藤村を訪問し、長編の題は『秘密 破戒』だと聞いたと報告。

（『志賀直哉宛書簡』）

*『志賀直哉宛書簡集』には、この日のものと推定した有島生馬の直哉宛書簡が掲載されているが、存疑。

*『蝕まれた友情』（二）によれば、生馬は駒込円通寺の一室を借り、直哉が一度泊まり掛けて遊びに行った時、部屋の小壁に等身大の八百屋お七の絵が描いてあった。この時、母・弟と三人で、同じ寺に部屋借りをしていたのが関安子で、当時は電話交換手。生馬は近く曙町の研究所にモデルに来て貰うつもりだと言っていた。一時期実際に行っていたが、間もなくそれも止め、番町の有島家の女中になった。

10・25（火） 直哉はメルヘンを読む。（日記）

10・26（水） 直哉の「作文」の「理想の人」は単に○の評価だった。「国文」、スマイルズの授業で当たる。帰途、岩倉道俱と話し、

茶屋に出入りすると聞き、墮落だと思う。夜、岩下家一が来る。（日記）

10・27（木） 直哉は、桜井政隆の「独文」で当たる。柔道の富田常次郎の送別の紅白勝負がある。夜、服部他之助の所の会合に行く。（日記）

10・28(金) 円通寺の有島生馬が直哉に手紙を書く。岩倉道俱の行動について直哉が不平を綴った手紙への返信か。(『志賀直哉宛書簡集』)

この頃か? 岩倉道俱が赤坂で遊蕩しているという噂を聞き、直哉は忠告に行く。有島生馬と一緒に行ってくれと頼む。(有島生馬『思い出の我』)

10・29(土) 高等学科及び中等学科四年級以上の学生百九十三名が日野町地方へ三泊行軍。(『学習院一覽 明治三十八年九月～三十九年八月』「記事摘要」)

この頃か? 小山内薫は、真砂座で、伊井蓉峰一座のために「ロメオ・アンド・ジュリエット」を翻案・上演。十一月五月初日。舞台稽古に直哉を招いてくれた。(『牛の角』(続々歌舞伎年代記)坤の巻)

11・3(木) 学習院で天長節奉祝式を挙行、その後、学生一同、青山練兵場で観兵式を拝観。(『学習院一覽 明治三十八年九月～三十九年八月』「記事摘要」)

11・6(日) 靖国神社大祭で、学習院学生一同参拝。(『学習院一覽 明治三十八年九月～三十九年八月』「記事摘要」)

この頃 武者小路実篤・松村務・裏松友光らが学習院の校風刷新を目的とするグループ桜心会を組織。(『武者小路実篤論』P.113)

11・12(土) 武者小路実篤・松村務・裏松友光・一條道良・本多実芳・正親町公和・岡部長景・何盛三・北尾富烈・北島貴孝・諸岡甲松が『同窓の学友諸君に!!』を発表して校風刷新を訴える。(M.37・12『学習院輔仁会雑誌』64号「雑録」)

11・14(月) 学習院学生一同、赤坂離宮御苑にて菊花を拝観。(『学習院一覽 明治三十八年九月～三十九年八月』「記事摘要」)

11・16(水) 有島生馬が直哉に手紙を書く。直哉・黒木三次を誘って、また真砂座を見に来てくれという小山内薫の葉書も同封。(『志賀直哉宛書簡集』)

11・17(木) 学習院出身の戦死者、高松公重・河田景延・本多忠彦・長岡護全・犬迫三次の追悼会。(『学習院一覽 明治三十八年九

月「三十九年八月」〔輔仁会記事摘要〕

11・22(火) 大宮公園万松楼の懇親会において、正親町公和・細川護立・木下利玄が連名で、直哉に自筆絵葉書を書く。（『志賀直

哉宛書簡集』）

この頃か？ 有島生馬が白馬会に出した伊香保の風景画を直哉に贈る。（『蝕まれた友情』二、四）

12・1(木) 里見弴らの絢友会の回覧雑誌「絢友会誌 第一」が創刊される。絢友会会員の里見弴・児島喜久雄・菅田敏光・中村

貫之・大村謙太郎・田中治之助の他、田村寛貞が執筆している。（M37・12「絢友会誌」）

12・2(金) 有島生馬が直哉に自筆絵葉書を書く。三日の消印。（『志賀直哉宛書簡集』）

この頃か？ 直哉は、泉鏡花『風流線』（M37・12・15刊）を読む。直哉は泉鏡花に熱中し、『風流線』までは一つ残らず読んだ。

（『愛読書回顧』）

12・17(土) 直哉は、夜、歌舞伎座に行き、撰津大掾一座を聞く。越路太夫の「絵本太功記」十段目、撰津大掾の「廓文章」（吉

田屋）。昇之助・昇菊も聞いていた。（日記）（『続々歌舞伎年代記』坤の巻）

12・18(日) 牛込の祖父・高橋元次が死去。（日記）

12・19(月) 直哉は、「学習院輔仁会雑誌」第六十四号「通信」欄に「それがし」の署名で、「寸信」、「雑報」欄に無署名で、「研究

部大会」、「秋季行軍記事」欄に「なかば」の署名で「銃煙」の一部を発表。（新『志賀直哉全集』⑩）

12・20(火) 柳宗悦が直哉の負傷について尋ね、前日の見舞いへのお礼を述べる葉書を出す。明日で学習院も終了とのこと。（『志

賀直哉宛書簡』）

12・23(金) 内村鑑三のクリスマス会で、直哉は神田の宝亭に行く。（日記）

12・24(土) 田中平一・川村弘・木下利玄が志賀家に来宅。（日記）

12・25(日) 直哉は朝、内村鑑三の所に行く。夜、服部他之助の家でクリスマス会。（日記）

12・26(月) 直哉は、黒木三次・柳宗悦と、鶴沼の馬屋原別荘に行く。(日記)

木下利玄が直哉に自筆絵葉書を書く。広勝と話したことなど。(『志賀直哉宛書簡集』)

12・29(木) 直哉は江ノ島に行く。(日記)

12・30(金) 直哉は帰京。(日記)

12・31(土) 直哉は、夜、田中平一と銀座を散歩。(日記)

晩、稲・プリンクリーと新橋の勸工場の所で出会う。(草稿『第三篇』四)〔大津順吉』第一三三) この前後の年か？

晩年の志賀直道は、芝青松寺の北野元峰和尚を相馬家に時々招き、皆で法話を聞く会を開く。(『祖父』二十五)

この年か？ 『書き初めた頃』によれば、直哉が《文学をやる気になったのは明治三十七年頃ではないかと思ふ。はつきり決心し

たのはそれから二三年后かも知れない。文壇では丁度自然主義が興らうとしてゐる頃だ。》が、自然主義も星董調も嫌い、上田敏も岩野泡鳴も読む気がしなかつたという。

* 『続創作余談』で、直哉は、『山形』は明治四十年の夏の事で、事実を只ありのままに書いたもの。父の買った熊沢といふ小さな銅山のバラックの事務所に一晩泊り、さういふ山の鮎夫生活に軽い程度ではあるが、興味を覚え、「苔の床」といふ小説を考へ、帰つてから里見に口でそれを聴かしたりしてゐたが、結局書いたものは出来なかつた。その頃までは頭の中では幾らでも出来て、有島生馬などは会ふと、「又何か出来たか」とよく訊いた程、出来るのだが、只しやべるだけで、書く^{もの}にならなかつた。私ではかういふ時代が相当永かつた。そして此時代の想像力は今より遙かに豊かに働いてゐたやうに思はれるが、それがそのまま、現在の自分に役立つ性質の想像力であつたかどうかは疑問である。幾らか大衆小説向きの想像力だつたやうな気がする。』と述べている。